

国連ミレニアム開発目標をラオスで学ぶ (上)

国際地域学部国際地域学科3年

渡辺美由紀、沼田愛



ビエンチャンの歴史的建造物「ワット・パー・タット・ルアン」。右端が渡辺さん、その隣が沼田さん

医療、教育の遅れ深刻

農村の貧困削減に尽力

私たち吉永ゼミでは「ミレニアム開発目標」を中心に発展途上の現状や国際協力について研究しています。ミレニアム開発目標とは、2000年に国連で採択された21世紀における国際社会の目標です。「極度の貧困と飢餓の撲滅」「初等教育の完全普及の達成」「ジェンダー平等推進と女性の地位向上」「乳幼児死亡率の削減」「HIV/AIDS、マラリアなどの疾病の蔓延の防止」など8つの目標を掲げ、明確な数値目標と、2015年までの15年期限を設けています(例えば「極度の貧困と飢餓の撲滅」では、2005年までに1日1ドル未満で生活する人々と飢餓に苦しむ人々を半減させることを目指す)。現在、これらの目標に向けて、国際機関、政府援助機関、そしてNGOがさまざまな活動に取り組んでいます。

ゼミでは、2006年8月19日から28日までラオスを訪れ、ミレニアム開発目標への具体的な取り組みについて理解を深めました。インドシナ半島に位置するラオスは中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムの5カ国と国境を接し、日本の本州ほどの広さに560万人が暮らす内陸国です。

ラオスは「インドシナの中で最も開発が遅れている国」といわれています。首都のビエンチャンには自立した建物があるわけではなく、特別高い建物もありません。ビエンチャン空港に着く時に飛行機から見た景色も緑の面積が圧倒的に広く、ここが首都であることに正直驚いてしまいました。

どのような環境の中で暮らしているラオスの人々の表情は、とてもおだやかで、笑顔がよく似合い、のんびりしているという印象です。ゆっくりと時間の流れている国で、本当に支援を必要としているのかとも思ってしまう。しかし、さらに一歩踏み込んでこの国を見ていくと、医療や教育といった基本的な制度が全く整っておらず、非常に深刻な状態であることが分かります。

例えば、ラオスの人々は病気やけがをした場合、メコン川を越えてタイに行きます。それはタイの医療サービスが

田園の学舎 まなびや

東洋大板倉キャンパス

発

~第3部 VII



ビエンチャンの朝市。野菜、肉から文房具までさまざまな商品が売られている

実際、ラオスは外国からの支援を真に必要とし、援助に頼っている国です。外国からの援助なしには成り立たないともいえるかもしれません。以下、国連食料農業機関(FAO)、独立行政法人国際協力機構(JICA)のラオス事務所、そして日本のNGOであるシャンティ国際ボランティア会(SVA)のプロジェクトについて、順に述べていきます。

FAOですが、ゼミの指導教官である吉永先生が、東洋大学赴任以前にこの国連機関の部長を務めていたため、ゼミでも詳しく勉強しました。FAOがラオスで行っている食料安全保障特別事業は、首都のビエンチャンから車で3時間ほどの場所にあります。この事業では、農村地域の貧困削減に取り組んでいます。具体的には、農業生産の増大や所得の向上を目的として、養鶏や養豚、農業用水の管理、集約栽培の普及などの多角化を図っています。

訪問先の村で私たちを待っていたのは、村の人々の大歓迎でした。もちろんFAO関係者が同行していたからでしょうが、私たちまでこんなに立派な歓迎を受けるとは思いませんでした。村の人々がここまで準備をしてくれ、日本から来た学生をも歓迎してくれたのは、FAOの支援が村の人たちに受け入れられ、大成功をしているからこそだと思います。

実際に、このプログラムによる村の変化について聞くと、以前より効率よく農業を行うことができるようになったこと、収入も上がったこと、さらに、畑や家畜からもたらされる利益の10%を貯蓄する仕組みもつくられています。

驚いたことに、このプロジェクトは無償ではなく、最終的には資金の返還が前提となっている。村人もそれを理解しています。組織を維持するためのルールも村の人々の間で決められており、民主的な運営をおこなうためにさまざまな工夫がなされています。

FAOのプロジェクト地にある村の集会所。村人が総出で歓迎してくれた